



宗像の文化財

『新修宗像市史』 原始・古代部会から

はじめに

原始古代部会は、昭和54(1979)年発行の玄海町誌、昭和60(1985)年発行の大島村史、平成9(1997)年発行の宗像市史通史編第1巻を基礎にして、3市町村市誌の内容に変更が生じたもの、存在は知られてはいたが具体的内容がわからないもの、発掘調査や採集品で新発見があったものを調査し、釣川流域、神湊から鐘崎の海浜部、大島・地島を含めた合併後の宗像の原始古代像を描くための整理を進めています。

合併から10年の 沖ノ島祭祀遺跡

合併後の宗像市を取り巻く歴史と文化財環境は大きく揺れ動いた10年でした。

沖ノ島祭祀遺跡の出土品は、昭和34(1959)年6月27日に国重要文化財「筑前国宗像神社沖津宮祭祀遺跡出土品」として指定を受けた後、統合・追加と名称の変更を行い、平成18(2006)年6月9日付けで国宝「福岡県宗像大社沖

津宮祭祀遺跡」出土品約5万1千点、重要文化財「伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡」出土品44点、沖ノ島祭祀遺跡第1次から3次調査の未指定品約2万9千点をあわせた約8万点もの出土品が国宝に一括指定されました。

平成15(2003)年12月24日の宗像市の第1回沖ノ島世界遺産登録実行委員会にはじまる登録推進活動は、平成29(2017)年7月9日に『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』は世界遺産登録により結実しました。

田熊石畑遺跡

田熊石畑遺跡は、かつて宗像高等女学校の敷地であったところで、当時赴任していた田中幸夫氏が校庭拡張工事の際に発見した遺跡でした。土地開発に伴う事前の発掘調査が平成20(2008)年4月から始まり、弥生時代の複数の墓から武器形青銅器15本が出土するなど重要な遺跡であることがわかり、平成22(2010)年2月22日に国指定の史跡となり、平成26(2014)年8月21日には発掘調査で出土した武器形青銅器など25

7点が重要文化財の指定を受けました。



田熊石畑遺跡から出土した武器型青銅器

大島御嶽山遺跡

大島御嶽山山頂は、地元住民により種々の遺物が採集されていましたが、昭和44(1969)からはじまった沖ノ島祭祀遺跡第三次調査の大島現地調査で金銅製品、須恵器を採集し、昭和54(1979)年発行の『宗像 沖ノ島』では祭祀遺跡として記載しています。

『「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群』との関連性が高いことから平成22(2010)年に発掘調査を行い、奈良三彩、金銅製品、滑石製品、有孔土器などの祭祀性の高い出土品があり、沖ノ島祭祀遺跡の半岩陰・半露天祭祀期の5号遺跡や露天祭祀期の1号遺跡の出土品に共通することから両地で共通する祭祀が行われていたことがわかりました。

宗像郡民の郷土愛に 支えられた宗像郷土館

昭和前半期のできごととして縄文時代の上八貝塚(出土した土器は北部九州縄文時代後期の標式土器となっています)、弥生時代の釣川遺跡(現在では古墳時代とされています)の発見や「いせきんぐ宗像」公園の敷地にあった「宗像郷土館」建設は、宗像の歴史と文化を語る上で特筆できます。

昭和7(1932)年6月に宗像高等女学校に赴任し、昭和14(1939)年5月に浮羽高等女学校へ異動した田中幸夫氏の業績については、宗像市史資料編第1巻の878頁から890頁に紹介されています。特に昭和11(1936)年7月の発起人会第1回委員会から



大島御嶽山遺跡から出土した滑石製品

はじまった「宗像郷土館」の建設と戦後の混乱期の管理者不在などを起因とした廃館とその後の管理運営について、氏は昭和54（1979）4月第95号「ふるさとの自然と歴史」に寄せた「廃墟の宗像郷土館」には、屋根に穴が開き、空がのぞく鉄筋神殿造りの姿と資料の一部の紛失や宗像大社、宗像高校、九州歴史資料館へ移管されたこと、地域資料館の管理運営の将来を見通せなかった自責の念が綴られています。

福岡教育大学と文化財調査

昭和30年代に国が推進した列島規模の大型土地開発は、宗像においても昭和38（1963）年10月の福岡学芸大学（現福岡教育大学）統合校舎の起工式以後、日の里、自由ヶ丘へと造成工事が続き、開発地に眠る文化財は消滅する危機的状況を迎えていました。

この時点では、福岡県における文化財保護体制は十分ではなく、記録保存のための調査主体は大学を中心とする調査会組織に委ねられ、調査を担ったのは宗像移転後の福岡教育大学でした。日の里団地の開発に伴う東郷遺跡群の発掘調査は昭和41（1966）年に福岡県史跡調査会が調査主体となっ

院三氏が現地主となっており、地元宗像の福岡教育大学学生が主力となっていました。

福岡教育大学歴史研究部 考古学班と文化財

東郷遺跡群の発掘調査は、成果として日の里団地内に全長64mの東郷高塚前方後円墳（宗像最古の首長墳）を現状のまま保存することになり、昭和42（1967）年には『東郷遺跡群』という報告書にまとめられました。この調査成果は後の田熊石畑遺跡の史跡指定にも大きく関わることになりました。昭和46（1971）年頃には考古学グループの活動は歴史研究部と改称し、宗像町三郎丸古墳群、福岡町津丸・久末古墳群、宗像町城ヶ谷古墳群と続く発掘調査を主導し、調査から報告書の刊行まで行うほどになりました。また、市内の遺跡等分布調査を行って遺跡の発見や遺物の表採を行い、現在の宗像市遺跡等分布地図に大きく貢献しています。

発見の歴史

宗像地域の遺跡と遺物が文献の上に現われるのは近世初期（17世紀はじめころ）です。貝原篤信・益軒は『筑前統諸社縁起奥津宮御事略書』の中で、黒田長政が筑前を治めていた時期、博多にあった切支

丹寺の人を遣わして、沖ノ島から「金の機物其余、女工の具」を取ってこさせたが、異変が起こるため、ふたたび、島に戻したと記しており、宗像大社神宝館所蔵の伝御金蔵金銅織機一式がそれにあたると言われています。

以後、『筑前国統風土記』などには宗像地域の項で石室や石棺などの発見記述が多くみることができ

上高宮古墳の発掘調査

個別の調査としては、大正15（1926）年に柴田常恵・島田寅次郎によって宗像大社境内最高所の上高宮古墳の再調査が行われ、石棺の図や遺物の状況が記録されています。この古墳は慶安3（1650）年、ここに社殿を建立したとき、一基の箱式石棺が発見され、内部から鏡などの遺物が出土し、石棺はもとのように埋め戻され、上に社を建てたとされたことが『宗像第一宮御造営記録』、『筑前国統風土記』に記されています。

東郷遺跡群の発掘調査

組織的な発掘調査は、昭和41（1966）年、宗像町東郷土地区画整理事業（現在の日の里団地）に伴う東郷遺跡群の発掘調査が最初となります。当時は文化財の調査を組織として大学が主体となっ

県史跡調査会を発足させ、調査は大学の授業の合間をぬって行われました。

宗像市が発掘調査を担う

宗像市が独自に文化財調査を行うことになるのは宗像市制施行直後の昭和56（1981）年5月に文化財の発掘調査を担う職員が配置され、浦谷古墳群（現在の自由ヶ丘中学校）47基の古墳と窯跡が調査されました。以後、市独自の調査を福岡県教育委員会の支援を受けながら数々の大型開発に伴う発掘調査を行ってきました。

宗像の文化財

今日ある田熊石畑遺跡の保存整備、大島御嶽山遺跡の学術調査成果、沖ノ島祭祀遺跡の世界遺産登録はこれまでの永い発見、発掘調査の歴史があつてできたことであることがお分かりいただけるものと思います。

（原始・古代部会 原俊一）